

日本歳時記卷之四

夏 漢書律曆志にはく夏（か）は假なり。假は大なり万物假大（ばんぶつかたい）
なるといへる意なり。尔雅（しが）に夏を朱明と云 ○和語に夏をなつと訓ぜしはあつ
という意なり。「な」と「あ」と相通ず暑熱の義をとれり

素問にいはく、夏三月これを蕃秀（はんしう）といふ。天地の氣
交り万物華茂（かも）す夜（よは）に臥し早く起、無厭於日（ひ
をいとうことなく）志しをして怒る事なからしめ、英華をして
秀を成さしめ、天氣をして泄す事を得せしむ。畢（ことごと）
く出し畢く達し長きを継ぎ高きを増す。此夏氣の應する所にし
て養長（ようちよう）の道なり。これに違ふ時は心を傷りて氣
収する者少なし

千金方にいはく、凡そ夏の間面（おもて）をあらはして臥事なか
れ。人をして面皮あつく癰を生じ、又面風（めんふう）をなさ
しむ

又曰、夏七十二日苦き味（あじわひ）の食物をはぶき辛きをまし
て肺氣を養ふべし

内經にいはく夏月冷石（れいせき）鉄物（てつぶつ）などを枕と
し涼を取るなかれ大に人の目を損ず。

養生論にいはく、夏の氣は熱なり故に菽（まめ）を食てこれを寒
（ひや）し熱（ねつ）につなるべからず

金匱要略にいはく、夏諸々禽獸の心を食事を忌む。恐らくは死氣
我が靈老（れいたい）を犯さん。宜しく苦賈（くはい）を食し
て以てこれを益すべし

月令廣義にいはく、夏至より九月にいたるまで一切漏宿物（ろう
じゆくのもの）及び水をのむ事を忌、又水にて盥濯（かんたく）
すべからず

又いはく、夏月腎氣衰絶す故に房色過度すれば元氣を傷り壽を損
ず、宜戒之

又いはく、汗の衣裳に透りたるを日に晒（ほ）し又これを着れば、
かならず痂子（あせば）を生ず。

壽養叢書にいはく、盛暑熱を衝く故へ冷水にて手を洗ふだに五臟

を乾枯せしむ、いはんや沐浴するをや。切（せち）に禁ずべし。
又冷水にて足を濯ふべからず。

又いはく夏の暑き時に石の上に坐臥（ざぐみ）すべからず熱すれば瘡（かさ）を生じ冷（れい）なれば疔（せん）を生ず。

又曰、夏月は心旺じ腎衰ふ、精化して水となり秋に至て則ち凝る。尤保齋（ほうしよく・精氣を出し惜しみする）して陰氣を圉（かくふ）すべし。常に熱物（ねつぶつ）をくらへば腹中温暖なり。生瓜（せいぐわ）果茹（かきや）氷水冷淘（れいたう）粉粥（ふんじやく）蜂蜜（みつ）尤食べからず。是を食すれば多くは秋時に必ず瘡痢をうれふ。

冷水を以て沐浴し手面を洗ひ背に淋（そそ）ぐ事なかれ。人をして虚熱眼（まなきこ）暗く筋脉厥逆し霍乱轉筋陰黄の疾を得せしむ。風に当（あたり）て臥事なかれ、眼中（めんちう）に人をして扇（あふぎ）を揮（つかは）しむる事なかれ。汗毛孔（かんたいもうこう）開展して風邪入やすし。これを犯せば人をして風痺不仁言語寒澁（かんじふ）の疾を患（うれへ）しむ。年壯（としさう）にして即ち害をなさずといへども亦病根を祢（かね）るなり。氣衰えたる人は桴鼓（ばちつづみ）の響（ひびき）に應ずるがごとし。酔中（すいちう）よろしくこれを忌むべし。孫真人（そんしん）がいはいく、夏月内（うち）に伏陰あり。冷水をのみ瓜桃生冷（せいれい）の物宜しく少く食うべし。かくのごとくすれば秋冬瘡痢をわづらふ事をまぬがる。

夏月暑（しよ）に傷られて身軀はなはだ瘦（や）する人あり。俗にこれを夏瘦（なつやせ）といふ。其病症によりて薬を服すべし。又万葉集（まんえふしふ）十六卷大伴家持（おおとものやかもち）嘆笑瘦人（そうじんをなげきわらふ）歌に

石麻呂爾吾物申夏瘦尔吉跡云物曾武奈伎取食（いしまろにわれものもうすなつやせによしといふものぞむなぎとりめせ）
鰻鱺魚（むなぎ）の夏瘦を治する事医書には見え得らねどげにさも有べき事なり。

四月

立夏（りつか）は四月の節（せつ）小満（せうまん）は四月の中（ちう）○四月の異名 孟夏（もうか）余月（よげつ）乾月（かんげつ）律（りつ）を仲呂（ちうりよ）という○四月の和名を卯月（うづき）と云卯の花盛（さかり）にひら

くるゆへにうの花月といふを略せりと奥義抄に見えたり。

朔日 國俗今日より五月四日まで^拾（あわせ）を着るゆへ今日を衣がへといふ古歌におほくよめり

八日 浴佛日（よくぶつにち）なり灌仏（くわんぶつ）ともいふ高僧伝に是日（このひ）浴仏するに都梁香（とりやうかう）を以て青色水（せうしきすい）とし蔚金香（うこんかう）をもつて赤色水（しゃくしきすい）とし丘降香（きうかうかう）を以て白色水（びやくしきすい）とし附子香を以て黄色水（おうしきすい）とし安息香（あんそくかう）を以て黒色水（こくしきすい）とし佛頂（ぶつちやう）に濯ぐとみえたり。月建（がつけん）の誤（あやまり）たる事は既に前にしるしぬ。本朝にて今日佛に水を浴（よく）せしむる事推古天皇の御宇（ぎよう）よりはじまるとなん。

十五日 浮屠（ふど）の結夏（けつげ）今日よりはじまりて七月十五日にいたつて終る。是を解夏（げげ）と云。此間九十日安居（あんご）して外（ほか）に出ず、草木蟲類（さうもくちうるい）等をやぶらん事をおそるる故なりと釈苑宗規（しやくえんそうぎ）に見えたり

晦日 沐浴

今月梅雨（つゆ）に先だちて屋（いえ）の漏（もら）ざるやうに豫（あらかじ）め備（そなふ）べしと田家曆（でんかれき）に見えたり。げに春は霖雨（りんう）しげく五月は梅雨ふる。此月はかならず久く旱（ひでり）す、俗これをさかひ日と云。天氣よく日長き時なれば屋宅（をくたく）を修理（しゆり）して功（こう）多くされば唐六典（たうのりくてん）に定役三功（ていえきさんこう）とて造作修理などするに時ある事をのせたり四月より七月に至るを長功（ちやうこう）と云。二月三月八月九月を中功（ちうこう）と云十月より正月に至るまでを短功（たんこう）とすと侍り。しかれば此月此日永き時に修造（しうぞう）

う)せば功多くしてなす事のはか行くべし又此月追梅雨(をい
ばいう)とて雨ふる事あり俗にこれを卯の花降し(くだし)と
いふ。又卯の花ながしともいへり。

此月天氣よき時書画(しよくわ)等を日に晒して取納め箱に入て
紙に糊をつけすき間をはり置いて梅雨(つゆ)の後是をひらく。
如此すれば黴(かび)いできずと月令廣義に見へたり。衣服も亦
(また)おなし。いまだ梅雨の湿氣にあたらざる前に日にさら
せば黴蒸(うつじやう)せずして黴(かび)生せず。

此月あたらしき筍(たけのこ)を塩淹(しほつけ)に貯ふべし。
其法先ず皮を去りてこはき所をすて二つにわりふしの間に塩を
一はい入れ桶にならべ上に幾重もかさね置ふたをして重石(お
もし)をかけ置べし。又筍を取て皮をさり熱湯(あつゆ)にて
ゆびき曬(さら)し乾(かわか)して収貯(おさめたくわふ)。
用る時米泔(しろみづ)にひたして用ゆ色白して鮮(あざやか)
なり塩筍は塩湯にてゆひきその湯にひたし置べしと居家必用(き
よかひつよう)に見へたり。

此月うゆべきものは黒豆(くろまめ)大豆(まめ)赤小豆(あつ
き)胡麻(ごま)胡蘿蔔(にんじん)等也

純陽の月なれば精氣を保養(はうよう)して發泄(はつせつ)す
べからずと月令廣義に見へたり。又此月暴怒(ぼうど)して心
を傷る事なかれこれをおかせば秋必ず瘡をうれふ又宿水(しゅ
くすい)にて面を洗ひ口すすぐ事をいむ

夏月六味丸(ろくみくわん)を服せば此月より始てのむべし醫林
集要(いりんしふよう)に春夏は腎氣丸(じんきぐわん)によ
ろし又夏は地黄丸(じおうぐわん)を服すべし冬は八味丸を服
するによろしといへり。六味丸腎氣丸地黄丸はみな同じ物なり
八味丸は六味丸に附子肉桂を加へたるなり。又藟立齋(せつり
ふさい)が醫案に加減八味丸は六味丸に肉桂五味子を加ふるも

のなり能發熱渴をなすを治す。蓋し運轉生腎の力ありて六味丸より功更に大なり。養生家（ようじやうか）久しく服するによるしといへり。

四月の六候、第一蟪蛄（ろうかくヒキガエル）鳴（なく）、第二蚯蚓（ちういん）出（いづ）、第三王瓜（おうくわカラスウリ）生（はふ）右立夏（りつか）の三候なり第四苦菜（こさい）秀（ひいづ）、第五靡草死（びさうかる）第六麦秋至（ばくしういたる）右小満（せうまん）の三候なり

立夏昼五十六刻十分夜四十三刻五十分小海昼五十八刻二十分夜四十一刻四十分月令廣義

五月

節を芒種（はうしゆ）と云中を夏至（けし）といふ○五月の異名仲夏（ちうか）皐月（こうげつ）鶉月（しゅんげつ）律を蕤賓（ずいひん）と云○五月の和名をさつきといふ。田うふるのさかりなるゆへさなへ月といふを略せりと奥義抄に見えたり

四日 沐浴 粽（ちまき）を製すべし。餌粽（たんど）を製するにはもちよね（餅米）を用ひず粳米（うるしよね）をきはめて白くし細末して沸湯（たぎるゆ）にてこね作り又沸湯にてにる。又うるし米ともち米等分にして水にて和し沸湯にて煮るもよし。凡（およそ）ちまき餅（だんど）などは米を磨（いしうす）にて引たるはわろし白（うす）にてつき末（ころ）してよし。又粽を煮に稻朮（いねしは）の灰汁（あく）にて煮べしと月令廣義に見えたり。唐の代に端午の粽其品多し角粽（かくそう）恭粽（かうそう）角爺（かくしよ）百素粽（はくそそう）九子粽（きうしそう）あり。粽を角のごとくにし又錐（きり）のごとくにし又菱角（ひし）のごとくし又竹の筒（つつ）のごとくし、また秤（はかり）の錘（おもり）のごとくにし、或（あるひ）五色（ごしき）の糸を縄になふて数珠（ずず）のごとくつなぐもあり。我が国にもいにしへば粽を五色の糸にてかさりけるとなんされい。伊勢物語にも人のもとよりかさり粽をおこせりとかけり。又拾遺集十八の細寡にもちいさきかさりちまきとあり 或たんこのことくして九つらぬるもあり。いづれもまこもの葉にてつつむなり。是を角粽（かくそう）とも角黍（かくしよ）ともいふなり。今日或は明日粽を親戚に送る

べし。

○國俗今日艾（よもぎ）菖蒲（あやめ）を屋ののきに挟（さ）は（さ）む。

按ずるに歳時記に五月五日艾をむすびて人の形のごとくして戸上にかくれば毒気をはらふと見えたり。國俗艾菖蒲をのきに挟むもかかる遺意なるべし。弘仁式（こうにんしき）に五月三日平旦（へいたん）に菖蒲蓮花など南殿（なんでん）の前にをくとあれば其時より有ける事とみへたり。又拾芥抄（しふかいせう）に五月四日主殿寮^{とのとのれう}葺内裏殿舎菖蒲（とのとのれうたいりのてんしやのあやめをふく）とあり。権中納言道雄の歌に至義集

けふといへはあやめは かりにふきそふる新

（し）は ふりぬる蓬生のやと

五日 端午（たんご）と云又重五（てうご）ともいふ。五雜俎（ござつそ）にいはく詣九齡上大衍、曆序にいはく謹以國元十六年八月端午獻之と、又宋璟が表にいはく月惟仲秋日立端午、しかる時は凡そ毎月の五日みな端午と称すべし此月にのみ限るべからずとなん、しかれども世俗には専ら五月五日を端午と称す 國俗今日粽をくらひ菖蒲酒をすすむ。

旦今日より麻の衿衣（かたびら）を着て八月晦日に至る。粽をくらふ事續齊諧記（ぞくさいかいき）にいへるは屈原五月五日みづから汨露（べきろ）に投（とう）して死す。楚人これをあはれみて此日に至る毎に竹筒の中に米を貯へ水に投じてこれを祭る。漢の武帝の時長沙の酔回（やうかい）といふもの海濱（かいひん）をとをりしに一人来りて三閭大夫（さんりよたいふ）と名乗り回に謂ていはく我毎年まつる事はなはだよろこぶに堪えたり。しかれども常に蝮龍（かうやぶり）のためにその食物をぬすまる。今よりのちは櫟（あふち）樹（のき）の葉を以てその上をつつみ五銖（ごさい）の糸を以て綺（ゆはふ）べし。この二物は蛟龍（かうりう）のおそるる所なりといへり。今日粽を食ふは此遺意なりとぞ。月令廣義には屈原が姉（あね）名は

女須女（しわ）これをつくりて屈原を弔ひけると見えたり。又粽は悪鬼にかたどりたれば、ねぢ切てこれを食べは鬼を降伏する義なりと安倍晴明が説に見えたり。かうやうの諸説まことに妄延なり。あに信用するにたらんや。周處（しうしよ）が風土記にいへるは菰葉（まこものは）を以て稻米（たうべい）をつつみ灰汁（あく）にて煮て粽とす。これ陰陽相包裹（あいはいくわ）していまだ分散せざるにかたどるとあり。これなん正説とはすべき 五月一陰生す故に陰陽包裹していまだ分散せず 又菖蒲酒をのむ事歳時雜記に午日菖蒲を取て縷（いとすち）のごとくし或細末して酒にうかべてこれをのめば陽氣を助け年をのぶといへり山沼九節の菖蒲よしとなん章簡公（しやうかんこう）が詩に菖蒲泛酒堯樽緑（しやうぶさけにうかべてぎやうそんみどりなり）。

○又いにしへは今日藥玉（くすたま）とて菖蒲よもぎそのほか雑花（ざつくわ）十種ばかりを五色（ごしき）の糸にてととのへてひぢにかくる事あり。おほやけには典藥療（てんやくりやう）あやめのつつみを奉る。又藥玉を御帳にかかげられ群臣（ぐんしん）にも給はる事のありしと也 延岳式公事根源等に見へたり又橘（たちばな）を藥玉に付る事日本紀にみえたり

挿絵

按ずるに風俗通（ふうぞくつう）に五月五日五粽（ごさい）の糸をもつて臂（ひち）にかくれば兵及び鬼を避け人をして瘟疫をやまざらしむ。一名は長命縷（ちやうめいろう）、一名は五色縷（ごしきろう）、一名は縷索（ろうさく）といふと載たり。提要録（ていようろく）に、北人（ほくじん）端午に雜絲（ざつし）を以て合歡（がふくわん）を結び手臂（しゆひ）に纏（まと）ふといへり。かかる遺意にとぞ。

○又世俗に今日菖蒲湯を用て沐浴（ぼくよく）する事あり。按ずるに大戴禮（たいたいれい）に五月五日蓄蘭為沐浴（らんをたくはへてほくよくをなす）とあり。楚辭（そじ）にも浴蘭湯兮沐芳華（らんとうによくしほうくわにぼくす）と見えたり。今

の人の菖蒲湯を用て沐浴するもかかる遺風なるべし。

○又今日婦人女子（ふしんによし）たはぶれに菖蒲を頭上（づじやう）に挿（さしはさ）み又腰にまとふ。如此すれば病を除くと俗にいひならはせり。歳時雜記に端午の日菖蒲艾を刻みて小さき人形に作り又は葫蘆（ころ）（ひょうたん）の形のごとしこれを帶ぶれば邪氣を避くと記せり。かかる遺俗（いぞく）にや王沂公（おうきこう）が帖子（てふし）にいはく、明朝知是天中節、旋刻菖蒲要辟邪（みやうてうしらんこれてんちうのせつ、ややしやうぶをきざんでじやをさくることをようす）、又章簡公（しやうかんこう）の詩に玉燕釵頭艾虎輕（ぎよくえんさとうがいこころし）（玉燕（そういう髪型？）の釵頭（かんざしの頭）の艾虎（よもぎで出来た虎の人形）ころし）

○今日京師賀茂の社にて競馬（けいば）あり。神官（じんくわん）七日の神事（じんじ）潔斎（けつさい）をして乗るなり。其数二十四、朔日に馬の足をそろへて一二の番（つがひ）を定め五日には装束を着し其色黒赤二つにわけたり。勝負の木とて馬場の西の方に楓（かいで）の木あり。是より北にて落たると乗りをくれたるを負（まけ）とす。見物の諸人群集をなす故に馬坊のあたりは所せくて大なる棟（あふち）の樹にのぼりて心やすきに見るもあり馬駆（はし）る時に棧敷（さんしき）なるは立あがり立たるものは埒（らち）のあたりにねちけさかり杖をつかへてとびあがりくはせ来る馬を見るにみるがうちに群集の中へかけこめばわらんべちとは手ことに竹林をつきて馬の跡よりささらになるほど打たつれば馬は空（くう）をとぶがごとくに馳行（はせゆく）或行あまりて横にきれ乗り手はおち見物はふみたをされて共にかた息になり氣をうしなふもあり。又人馬川中まではせ行て川にをち衣裳をぬらしてかへるもあり。きびしく潔斎をなすといへどもしらずして客人の穢れたるにあふときはかならず落馬するといへり。凡そ賀茂の村民は社人ならず祭日にあらざれどもことつねに作所の火をいみ又我家の火をも人にあたえず。はなはだ穢火（えか）をいむ所也。むかしは大内

(たいだい) 武徳殿(ぶとくでん)にして五日に競馬騎射(きしや)の事ありて五位以上走馬を奉るよし延崑式(えんこんしき)にしるせり。
花鳥餘情(くわてうよせい)にはく五月五日の節天皇(てんおう)あやめのかつらをかけ給て武徳殿に行幸(ぎやうかう)ありて六府騎射の事あり。五日は五位以上の人奉れる馬に乗、六日は寮の御馬丑乗て競馬の事あり云々。今賀茂にて朔日足汰(あしそろ)五日に競馬する事にしへの騎射走馬の儀式也とかや。

按ずるに文昌雜録(ぶんしやうざつろく)に端午日走馬謂之躡柳(たんごのひむまをはしらしむるこれをせきりうといふ)とあれば、もろこしにても今日馬を走らしむる事の侍るならじ。

○今日山城紀伊郡源原乃里藤の森の祭には鎧を着して競馬あり此神は延崑式にいへる真幡寸(まはたき)の神社なり。日本後紀に鴨別雷神(かもわけいかづちのみこと)の別也といへり。そののち又三所の皇子をも此所に祭らる。早良(さら)親王伊豫親王井上内親王也。今日の祭によるひを着する事は光仁天皇(くわうにんてん)にわうにんてんおう)の御宇天応元年に異国の凶賊責め来たるよし聞えければ天皇第二の御子早良親王に大朝軍として退治あるべきよし宣旨(せんじ)ありれば、當社に祈誓(きせい)し給ひて五月五日に出陣し給ふ。神感(しんかん)しるし有て俄(にわか)に大風吹来りて大海(だいかい)波をひるがへしければ夷賊(いぞく)一戦にも及ばず波にただよひてことごとくほろびにけり。其時親王の出たるに軍勢のさまをまなびけるとかや。又都鄙(とひ)の童子今日菖蒲(あやむ)のかぶと太刀をもてあそぶ事も此祭をまなぶとなり。されば此事むかしは厚き紙に人形をほり付薄き板を兜の形にこしらへ或菰(こも)の葉にて馬を作り或木を鎗長刀のごとくけづりなどして戸外に立て侍りしが近年は風俗無功をこのみて木をもって人馬の形をきざみ又はりこにして彩色をほどこし或甲冑をきせ劍戟(けんげき)をもたせ戦闘の勢をなさしめて戸外にたて侍る。是をかぶといふ。又紙旗にいろいろの絵をかきて長竿につけ是をも戸外にたて侍る。こ

れをのぼりと云。或絹（きぬ）を用るもあり。或は長旒（ちやうりう）を加えて是を吹きながしと云。朔日より五日まで兒童の弄事（ろうじ）とす。

按ずるにもろこしにもこれに似たる事あり。歳時雜記には端午に都の人天師（てんし）を畫（かき）て賣り又土にて天師を作り艾を以て鬚（ひげ）とし蒜（にんにく）を以て拳（こぶし）とし門上に置。又艾を採り結んで人の形に作り門戸の上にかくれば毒気をさくといへり。按ずるに道家（どうけ）に後漢の張陵を社師として天師と称す。

○今日草あはせする事あり。荆楚歳時記に五月五日四民並びに蹋百草（ひやくそうをふむ）。又百草を鬪（たたかは）しむるの戲（たはぶれ）ありとしるせり。しかればいにしへより有ける事也。日本紀に蓼蕸（くすりうり）とあるもこの事をいへり。章簡公（しやうかんこう）が帳子（てふし）に百草鬪香茗（ひやくそうかうてうをたたかはしむ）又章簡公が詩に今朝鬪草得宜男（こんてうくさをたたかはしてぎだんをえたり）とあり、欧公（おうこう）が鬪草の詩に共鬪今朝勝、盈檐百草香（すでにたたかはしめてこんてふかつ、せんにみちてひやくさうかうばし）とも侍り。百草の汁を搗きとり熬（いり）て膏（あぶら）とし膏藥に配すれば百病瘡疽に貼して常の膏藥に其功十倍せり又今朝日未出時、百草を採りて汁をつき出し石灰に和して餅（へい）とし陰乾（いんかん）にす。一切の金瘡を治むと月令廣義に見えたり。百草を取に牛膝（いのこつち）澤漆（そうたいくさ）重蘗草（とらざと節修記要略に見えたり牛膝は胎を落し澤漆（甘逐）重蘗草（ドクダミ）は毒草なるがゆへなり。

○諸藥草をも取納る日なり。又艾草を取納むべし。纂要にはく五月五日採艾治百病と凡艾は上巳と端午に取納るをよしとす。但し艾の苗みじかき時とるがよしと鍼灸聚英（しんきうしゆえい）に見えたり。市にうる艾は他草をまじへ又採時あしければ用べからず。されども伊吹（いぶき）もくさは性（しやう）よし又紫金錠紫金丹千金錠子などを合（あは）するにも今日よし。

○又今日競渡（ふなくらべ）する事あり。これ屈原をすくふ遺意

なるよし。歳時記にしるせり。月令通考には越地出を引て競渡は越王號に
始ると記せり

石屏（せきへい）が端午の詩に

榴花角黍薦時新、何處家々不酒樽、堪笑江湖老詩客、也隨蒿艾
上朱門（りうくわかくしよじしんをすすむ、いずれのところか
かかしゆそんならざる、わらふにたえたりごころうしのかく、
またこうがいにしたがつてしゅもんのにのぼる） 又 前人
海榴花上濛濛雨、自切菖蒲涎濁醪、今日獨醒無用處、為君痛飲
讀離騷（かいりうくわしやうもうもうたるあめ、みづからしよ
うぶをきってだくろうにうかぶ、こんにちひとりさむようしよ
なし、きみがためにつういんしてりさうをよむ）

十三日 此日竹を移栽（うつしうゆ）べし。晋書に五月十三日を
竹碎日（ちくさいにち）とす又竹迷日（ちくめいにち）ともい
ふ。この日竹をうゆればかならず活（いく）としるせり。

晦日 沐浴

此月 淫雨（いんう）ふる。これを梅雨（つゆ）と名づく。又徽
雨（ばいう）ともかけり。梅雨（ばいう）の中肥土（ひど）に
芙蓉（ふよう）柘榴（ざくろ）桜桃（にはさくら／ゆすら）な
どの枝をえらびてさすべしと月令廣義に見えたり。此時黄土に
つづく薔薇（しやうび）水梔（こくちなし）をさせば甚よく活
く。又貧家（ひんか）人功（じんこう）ともしき輩（ともがら）
は奴僕（ぬぼく）事を廢しおこたりては家事調ひかたし。梅雨
（ばいう）久霖（きゅうりん）の中も家僕（かぼく）をして薦
（こも）をあみ履（くつ）をつくらしむべし。薦は書籍（しよ
じやく）器物（きぶつ）食物（しよくもつ）等を晒し新たに栽
（うへ）たる草木菜蔬（さいそ）におほい牆屏（しやうへい）
を葺くゆへ其功用広し。又梅雨水を大瓶（かめ）に貯へ置き茶
（せや）を煎ずればはなはだ美なりと茶譜（ちやふ）に見えた
り。但日をへては飲べからず。又梅雨水にて癬疥（せんかい）

を洗へばそのあとなし。醬（しやう）を作るにこれを用れば熟しやすく衣をあらふにこれを用れば灰汁（あく）のごとしと東垣（とうえん）が食物本草にみえたり。

梅雨出入の説紛々（ふんふん）として一決し難し婢雅（ひが）にはいはく閩人（びんひと）立夏の後庚（かのえ）にあふ日を入梅（にゆうばい）とし芒種（ぼうしよう）の後壬（みづのえ）に当る日を出梅（しゆつはい）とす。神枢（しんすう）にはいはく芒種の後丙（ひのえ）にあたる日を入梅とし小暑（せうしよ）の後未（ひつじ）にあたる日を出梅とす。又碎金録（さいきんろく）にはいはく芒種の後壬（みづのえ）にあたる日を入梅とし夏至の後庚（かのえ）にあたる日を出梅とす。又李時珍が説には芒種の後壬にあたる日を入梅とし小暑の後壬に当る日を出梅とす。三元帰正（さんげんけいせい）にはく芒種の後丙（ひのえ）の日に当るを入梅とすと云説是にちかし。其時雨湿（うしつ）衣を斑（まだら）にする驗（しるし）ありと見えたり。凡そ梅雨出入の期（ご）は和漢ともにさまざまの説侍るなり。されどもその説合がたし。損軒嘗て黴雨の説を著はしていはいはく、陰陽之往来、固有定期、然而天地之流行、變化無窮、故寒暑風雨之時候、必有遲速、必不拘以日数、然刻梅雨出入之期、雖出于華夏之書、恐不可拠信、孟子曰悉信書不如無書、誠哉此言乎、只以芒種之後霪雨初降之日為入梅、以霪雨収断之日為出梅、庶亦乎其不差矣、十月液雨亦恐然也（陰陽の往来、固より定期あり、しかうして天地の流行、變化窮する無し、かかるが故に寒暑風雨の時候、必ず遲速あり、必ず日数をもつて拘るべからず、然る刻（とき）は梅雨出入の期、華夏之書に出ると雖も、恐らくは拠り信ずべからず、孟子の曰はく悉く書を信ぜば書無きにしかずと、誠に此の言（こと）かな、只だ芒種の後霪雨初めて降るの日を以て入梅とし、霪雨収まり断ふるの日を以て出梅とせば、亦たは其の差（たが）はざるに庶（ちか）からんや、十月の液雨亦た恐らくは然（しか）らん也）

世俗に半夏生の忌（はんげしやうのき）といふ事あり。簠簋内傳（ほきないてん）にはいはく五月の中より十一日にあたる日なり。此日不浄を行はず淫欲を犯さず五辛酒肉を食らはざる日なり。

按ずるに簠簋の抄に摩耶夫人（まやぶじん）の中陰（死んでから四十九日間）の真中（まなか）なるゆへに善事をなし悪事をのぞくといへり。予おもふに半夏生は七十二候の内夏至の第三候なれば、是に附会（ふくわい）して妄説をいへるならじ。

夏至の日井を浚（さら）へ水を改むれば瘟疫をやまずと漢の礼儀志（れいぎし）に見へたり。又夏至の後丙丁（ひのえひのと）にあたる日夫婦の交はりをすれば大にあししと千金方にしるせり。

此月の初、青梅（あをむめ）を取皮をけづり核（たね）を去り、籠に入れ火上につり置いて後ち収め用ひて烏梅とす。皮あつき時はやく取べし。又梅つけ梅ほしをも製すべし。

此月米苞（たはら）を改め束（つが）ぬべし蟲くはず。苞ゆるめばかならず蟲生ず又夏の間蛤殻（はまぐりから）の灰を多く米苞にぬり置ば不蟲（むしくはず）。

此月天枢中脘等に灸し暑月のためあらかじめ保養すべし。又精気を保養（ほうしよく）すべし。格致餘論（かくちよろん朱丹溪）にいはく、古人於夏必獨宿而淡味、兢兢業業於愛護也、保養金水二臓、正嫌火土之旺尔（古人夏に於て必らず獨りしゆくして味わひを淡ふし愛護に於てきやうくがふくと也、金水の二臓を保養するは、正に火土の旺を嫌ふみ）

月令にいはく是月也、日長至、陰陽争、死生分、君子齋戒、處必掩身母躁、止聲色母或進、薄滋味母致和、節奢欲定心氣、又曰、是月也可以居高明、可以遠眺望、可以升山陵、可以坐臺榭（この月や、日の長きこときわまる、陰陽争そひ、死生なかばなり、君子齋戒して、おるところ必ず身をおほふてさわぐなかれ、聲色を止どめて進むことなかれ、滋味を薄ふし和をきはむること母れ、奢欲を節にし心氣を定かに、又曰、この月や以て高明居る可し、以て遠く眺望す可し、以て山陵に升る可し、以て臺榭（たいしや）に坐す可し）

保生心鑑（ほうせいしんかん）にいはく是月枯井（こせい）及び
深穽（しんせい）の中に下る事なかれ。毒氣おほし。先鷄（に
はとり）の毛を以てその中にとし入るにその毛旋舞（せんぶ）
するものはすなはちこれ毒あるなり。

此月菰（にら）をくらへば力（ちから）ともしく目を損ずと金匱
要略に見えたり。又煮餅（にこひもち）鯉魚雞及び未熟（いま
だじゆく）せざる果（くだもの）をくらふ事なかれ。鱉龜（で
うがめ）と乾魚（ほしうを）とおなじく食べからず。又枇杷と
炙肉（あぶりにく）熱麪（ねつめん）とをなじく食事なかれ
月令廣義壽養叢書にしるせり 千金方に猿廉の肉を食事なかれ又金匱要
略に五六月沼中（たにがはのうち）の停水（たまりみづ）を飲
事なかれ魚龜（ぎよべつ）の精涎（せいぜん）内にあり是をの
めば痢となる。

此月農人は田に苗を挿（さしはさ）むべし。又圃（はたけ）に大
葱（ひともし）のたねをうゆべし烈しき日にはこもをおほふべ
し。

五月の六候第一蟪蛄（とうらう）生（むまる）、第二鵙（もず）始
鳴（はじめてなく）、第三反舌無聲（はんぜつという鳥が鳴かな
くなる）右芒種の三候なり。第四鹿角（しかのつの）解（おつ）、
第五蟬始鳴、第六半夏生（おふ）右夏至の三候なり。

芒種昼六十刻二十分、夜三十九刻四十分。夏至昼六十一刻三十分、
夜三十八刻三十分月令廣義

六月

節を小暑（せうしよ）と云、中を大暑（だいしよ）と云○六月の異名、
季夏、且月（しよげつ）、伏月（ふくげつ）、律を林鐘（りんしやう）
といふ ○六月の和名を水無月といふ。まことにあつくして、ことに
水泉かれつきたるゆへにみづなし月といふを略せるとぞ

朔日 賜氷節（しひやうのせつ）と名づく。今日氷（こをり）を食事あり。按ずるに仁徳天皇の六十二年五月に額田大中彦皇子（ぬかだおほなかひこのおうじ）闘鶏（つけ）といふ所にかりに出給ひて山に上り陣中を見やり給ひしかば廣き庵（いほり）を作りたるやうな物あり、人をつかはして見せ給ふに窟（いはや）なりと申、其時かの山のあたりに侍る人をめして問はせ給ふに氷室（ひむろ）なりと申、皇子その氷（ひ）をばいかやうにして納むるにと問せ給ふ答て申さく土を一丈餘りほりて草を其上にふき茅萱（あしかや）などをあつめしきて氷をおさむれば、いかやうなる大旱（たいかん）にもとけず、是を取て熱月に用るとなん。其時皇子此氷を仁徳帝に奉らせ給ひければはなはだ睿感（えいかん）ありしよし日幸紀にのせたり。是日本にて氷を奉る初なり。其後より季冬（きたう）ごとにこれを納て国々所々氷室をおかれ侍りしなりを記世まで丹波のおく山に氷室ありけるとなん又富士山、伯耆の大山（たいせん）などよりも氷を献せしなり。民間には舊臘（きうろう）十二月のこと）製せし糕（もちい）をたくはへ置今日食して氷をくらふに準ず

もろこしにも氷をおさむる事あり。周礼（しゆらい）に凌人（れうじん）職と云は氷室をつかさどる官なり。去冬（きよたう）の極寒に深山幽谷（しんざんゆうこく）より氷雪（ひせつ）をとりて是をおさめ夏に至て暑氣をさけんがために氷を出して群臣（ぐんしん）にわかち賜ふ。毛詩（もうし）に二之日鑿氷沖沖三之日納之凌陰（二の日氷をちゆうちゆうとうがつ、三の日之を凌陰（れういん）に納む）といへり。左傳（さでん）に日有北陸而蔵氷西陸朝覲而出之（日（ひ）北陸にありて氷（ひ）をおさむ、西陸にして朝まみへて、之を出だす）と云り。是みな氷をおさめて出す事をいふなり。晋の石季龍（せききりゆう）三伏（さんぷく）の日氷井臺（ひやうせいだい）の氷を取て大臣にあたへし事鄴中記（げうちうき）に見たり 羅

山の説

六日 神麴（しんきく）を製する日なり。製法は本草などに詳か

なればここに記に及ばず。

十六日 此日かしやうといふ事あり。歌林四季物語（かんりんしきものかたり）にいはく、かじやうは嘉祥とかきて仁明（にんみよう）のすべらき衆和の比ほひに御代のさか行ことをいのらせおはして賀茂上の御やしろにたてまつりて御はらひなどなしそめ給ひたまへり六月十日あまり六日なん吉日なるよし御うらの人々かうかへ申せばとて其の日おこなはれ年号をもあらためて嘉祥とものせしかば、なかなか此事嘉祥とねんがうによりてさだめられしと當社縣主（とうしゃあがたぬし）賀茂の道幹が日記に侍り。又羅山子（らさんし）の説には近比世俗に云伝るは室町家大榭の時に六月納涼のあそびのために楊弓（やうきう）を射事よきものとし負（まけ）たるもの嘉定錢（かじやうせん）十六文を出して合物を買ふてかちたるものをもてなすなり。嘉定は宋の寧京（ねいきう）の年号にて十七年あり其年毎に錡（い）たり。錢に元年より十六年までのしるしあるを十六錢あつめて今日一人ごとのもてなしものの代に定むるなり。右の本説たしかならざれどもならはし来ることかくのごとし。

今按ずるに四季物語の説にしたがへば、そのよつて来る事誠に久しき事になん侍り、されども延喜式、江家次第、公事根源、（建武）年中行事などにも見へずまして國史にもしるさざれば、いぶかしき事にして覚え侍れ。羅山子の説のごとくちかき世よりの事なるにや。猶本朝の故実にくはしからん人を待のみ

晦日 沐浴 此日みな月はらへする事あり。世諺問答にいへるは夏と秋との剋（こく）したるを祓へすつる功能（くのう）の侍るなり。天武天皇の御時よりはじまれり。大祓といふは朱雀門（しゆしやくもん）にて百官一同にせしとかや。わたくしの家に福をせゆるとては

みな月のなごしの祓をする人はちとせのいのちのぶといふなり といふ歌をとなふるといへり。法性寺の関白の佛記にはおもふ事みなつきねとてあさのはをきりにきりてもはらへ

つるかな　といふ歌を詠ずべしと見へたり　此うた後拾遺集に出たり
和泉式部がうたなり　又延岳式第八に六月晦日大祓の祝詞をのするを
見るに卜部家（うらべけ）に中臣祓（なかおみはらへ）といへ
るに大に同ふして首末（しゆまつ）のことは少し異なり。六月
に閏月（じゆんげつ）あらば祓いとおこなはれしやといふに後
の六月にあるべしといふ事東鑑（あづまかみ）に見えたり。
又今日川原に出て麻の葉にて人形を作り身をなでて歌をとなへ
て川にながすを撫物（なでもの）といふ。

八雲御抄にはく六月祓邪神をはらへなだむる故になごしと
云なり。河邊（かはべ）に五十串（いそくし）たてあさの葉
などにんするなり夕又夜する事なり後撰（ごせん）に加茂川
のみにこすみててる月を行てみるとや夏はらへする題はみ
な月はらへしに河原にまかり出て月のあかきをみてといへり

挿絵

しかるを六月晦日なにごすみて照る月いかが尋ねべしとあ
り。定家郷（ていかのげう）の注にはく、見那月はらへ明
月之由人皆疑之、古人六月之比必出川原臨祓、又納涼及絲竹
之遊及詩歌之奥、恒例也、不限晦日、是祢皆月祓、長元之比
或人記、御倉小舎人可参皆月祓之由催之、件祓六月十三日也

見可靈枢　此説によれば宛（さなが）らに晦日に限らざるか。（明月
の由人皆これを疑ふ、古人六月のころ必ず川原に出で祓へに臨む、又た納涼及び絲竹
の遊及び詩歌の奥、恒例なり、晦日に限らず、是れを皆月祓と祢す、長元のころ
ある人の記に、御倉の小舎人皆月祓へに参る可きのよし之を催ほす、件の祓へは
六月十三日也）

九夏三伏（きうかさんぷく）といふ事俗人多くいひならはせり。

九夏とは夏三月九十日あればかくいへり。伏とは金氣伏蔵（き
んきふくざう）の日なり。四時のうつりかはりみな相生（さう
じやう）を以てす。春は木にして冬は水にかはる。水生木（す
いしやうもく）なり。夏は火にして春の木にかはる、木生火な
り、冬は水にして秋の金にかはる金生水なり。ただ秋は金にし
て夏の火にかはる火克金（くわこくきん）にて金は火をおそる。
故に庚日にいたりてかならず伏す。庚は金なり。三伏とは夏至

の後第三庚を初伏（しよふく）とし第四庚を中伏（ちうふく）とし立秋の後第一庚を末伏（まつふく）とす。故に三伏と云。凡そ四十日極はめて熱（ねつ）す臘（ろう）の大寒に対するなり。厚忍釈？に見へたり

梅雨霽（はれ）て後書を日に晒すべし。新き薦にひろき表紙を下にして乾（ほ）す。帶繩（をなわ）に置いて晒せば表紙損ず。天氣好日なりとも一日に一度なるべし。朝より晒し午未の時収む。晩には暴雨の憂へあり、はやく収むべし。屋下（おくか）にならべて熱をさまし一夜置いて明朝筭（はこ）に納む。凡そ書を晒す事一度に多く晒すべからず。暴雨のおそれあり。又多ければ家奴（かぬ）厭（いと）ひ倦（うみ）て心を用ひず書をそこなふ事あり。損壞（そんえ）あるは修補し断えたりとち糸を補ひ縫ふて各々故（もと）のごとく櫝中（とくちう）に納め各其所を行せしめて蓋を閉づべし。屋中に久しく晒さんよりかくのごとく烈日（れつにち）に一度晒したるが蟲はまず湿なくしてよし。毎年久しくさらせどもいささか書の損壞なし古人も書を外にさらせると見へたり。もえき色などの表紙も表帋を下にするゆへに色かはらず居家必用（きよかひつよう）にいはいく古人書を蔵むるに多く薫香を用て蠹（しみ）をさく。今の七里香これなり。但し七里香は山礬（じんちやう）の事にて芝（おそらくアクシバのこと）は又別物なり。芝の葉は銀杏の葉に似たりと云故に今和俗いちやうの葉を帋の間に納るはあやまりて銀杏とおもへるなるべし。又麝香を書厨（しよちう）の中に入置は囊をつく一つに樟腦を用るも亦よし

圖畫（ずぐわ）墨蹟（ぼくせき）をも一時許（ばかり）日に晒すべし。是も新き薦或浄きしぶ紙などの上に置べし。縄にかけ竿にかくるはあしし、久しく晒すべからず。圖畫のうらをほすべし表をさらすべからず。其上にひとへなる紙を長くひろくつきたるをおほふべし。軸に近き方を能くほすべし。これ又如此すれば蟲はまず。道生は旅には四五月の間梅雨の前に書籍衣服などをさらしてよし。書は箱に入ふたをおほひ圖畫衣服などはかたく封して置けばかび出ず梅雨過てはすでに湿熱に蒸されてかびいづるもの也といへり。

甲冑兵具（かつちうひやうぐ）も布かもめん布をおほひて半時ばかり烈日（はげしきひ）に晒すべし。久しく晒すべからず。屋下に収め熱氣さめて後翌日函中（かんちう）に納べし

衣服をも晒すべし光絹（はぶたへ）は久しく干すべからず、又黄緑紅色などの色あざやかな物は日に晒すべからず。これを晒せば色かはる。物類相感志（ぶつるいさうかんし）に夏月衣のかひて色つきたるをば冬瓜（とうり）の汁にひたし洗ふべし。其痕は又枇杷のさねをすりて細末して洗へば其斑（まだら）自（をのづから）去るといへり。居家必用には梅雨にかびたる衣服をば梅葉を熱して洗べしとあり又居家必用にいはく、凡そ衣服の墨（すみ）に汚（けが）れたるをば杏仁の皮を細末し碾茶（ひきちや）と等分に合せけがれたる上にいねりかけ温湯（おんたう）にてしめしてよくよくすり付其後洗のくべし。新天南星を取て絹のけがれたる所を度々すれば自去（をのづからさる）。又白梅（むめぼし）をすり付て洗てもよし。油にけがれたる衣服をば滑石天花粉各等分を末して付猶遺（つき）たる時は又付くべし。五度に過ずして自落（おのづからおつ）。又汚れたる所に蚌粉（はうふん）をひねりかけ熱熨斗（ひのし）にてこれのをせばすなはちよし。又蜜を用て洗てもよし。漆（うるし）にけがれたる衣服を洗には、杏仁川椒等分に合せ研爛（すりただら）かして汚れたる所を揩（すり）て淨く洗へば自落、又血に汚れたる衣服をは冷水にてあらへば落つ、又血衣を洗ふに蘿蔔（だいこん）の煮汁か又は菖蒲（しやうぶ）を細末して水に洗へば白くなるなり。以上居家必備

刻み置たる薬種（やくしゆ）をも紙に包みながら其口をひらき日にあてて晒べし。きざまざる薬は其まま日に干べし。千金方にはく薬をさいさい日に干ことなかれ、薬力うすくなる故なり。当时用ひたる薬は烈日にほし新瓦器（ぐわき）に入土にて口を封じ用る時開き出て急に又封すべし。年をふれども新しきがごとし。丸散の薬も如此すべしとぞ。凡そ世の人茶を壺に貯へよく保護（ほうご）すれども薬をたもつ事をしらず。薬は尤人を

養ひ病をいやす物なれば貴重（きてう）して収めたくはへ気味のぬけざるやうにて性をたもつべし。口せばくもの入ほどなる新しき瓶（かめ）を多く作らせ薬を入わらをつがねて口をよく封し置べし。如此すれば久しく過ても気味うせず。是薬をたもつの良法なり。地黄、白芷、当帰、羌活、川芎、神麴、黄芪、甘草などは時々晒ざれば蟲くふ物なり。其物はしばしばさらす事なかれ気味うすくなるゆへなり。

器物も蛙（むしはむ）べきものは尽（ことごと）く晒すべし。うすき板にて製したる物の類、日に晒事なかれ。墨をば日に晒すべからず只屋下（をくか）の壁に縄て置くべし。筆をも網みつらねて高い所にかけて置べし。猶器中にをかばしばしば日にほすべし然らざれば蟲はむ。筆の軸は染めたるが蟲はまず。就中（なかんづく）黒一色は五倍子（ふし）鉄漿（かね）にて煮染る故蟲はまず。凡そ筆を収る事東坡（とうば）は黄連（わうれん）の煎湯（せんとう）を以て輕粉（けいふん）を調へ筆頭（ひつとう）をひたし乾くを待つてこれを収む。久しきを経ても蛙（むしはま）ず。山谷は山椒（さんせう）と黄連を熱しその汁にて松煙（せうえん）墨をすり筆頭を染む。是又尤よしと潜確類書（せんかくるいしよ）に見たり。又葦の汁黄柏の汁などに浸してほし置ても蛙ず。又夏秋の間筆器に樟脳を入置ば蛙ず。凡そ筆を洗ふには熱湯（ねつゆ）よしと云り。

此月はなはだ熱して飯（いい）饘（すえ）るに、英？（ひば）の葉を飯の上におほへば一宿経ても饘えずと農桑撮要（のうさうさつよう）に見へたり又生魚（なまうを）塾食（じゆくしく）などを井中につりさげてをれば損せずと月令廣義にしろせり。又夏月生肉を収むるに麵をうどんのごとくこねて肉をその中につつみ油の中に入置けば久して損せず。麵は餅となして食てよしと花家必用に見たり。又臘雪水（らうせつすい）を貯置きたるに魚肉を浸し置ば損せず。

夏月に煎じたる薬を其ままをけば味はやく変じて性あしくなる。

酒も又しかり。とくりに入れて口を能くふさぎ縄を付て井の中にとくりの底のかしらひたるほどにつりさげ置べし。久しくありても敗せず。酒をかくのごとくすべし。

此月山林に近き所は薪を多く伐り貯ふべし。山林遠き所は多く買貯（かいたくわへ）置くべし。家奴の暇（いとま）ある時割りて晒（ほし）てよし。又炭をも買貯べし。

菜瓜を多買て菹（つけもの）とし脯（ほしもの）とすべし。

○乾瓜（ほしうり）をこしらゆる法 瓜を二つにわりなこを去り瓜の片われの内八九分ほど塩を入一夜おしをかけ翌日取出しうへ下にうちかへしほどよく日にほす。久しくほすべからず。又未憎につくるには一たるほして後つくべし。

○瓜を糟淹（かすつけ）にする法 世俗に奈良つけと云瓜を二つにわり、さねを取よくうちをこそげあらひて水気のなきやうにかはかし瓜の片われの内に塩八分めほど入れ瓜あつくは九分目ほど入れ桶（おけ）に入よくよくをしをかけ二夜おきて取出し其塩汁にてあらひて塩汁のかはく時まで日にほし、さて瓜に糟を多くぬり口せばき瓶（かめ）に入ばらべて瓜のつきあはぬやうにしてそのうへに塩を霜のふりたるごとくに置なり。糟にも塩少しまぜてよし。大抵糟壺斗に塩五合ほどまぜてよし。糟多く瓜すくなきがよし。瓜多く糟すくなきはあしし。

俗の戯（たわほれ）にかすに瓜を付くべし。瓜にかすをつくる事なかれといへり。瓶の口より風ひかぬやうにふたをして上を赤土にてぬり置。はし桶は口ひろきゆへ瓶の口せはきにつけたるがよし。もし桶につけはふたをしてすき間をよくふさぐべし。瓜はみなみなうつぶけてつきたるがよし。又豇豆（ささげ）茄子（なすび）なども一二夜塩につけ置おしをかけて汁を出し糟につくれば甜美（てんび）なり。

瓢（ゆふがほ）茄子（なすび）などをなどを干物（ほしもの）とし或塩淹（しをつけ）にして貯置べし。

○乾瓢（かんひよう）の製法 好天氣をうかがひゆふがほを上

皮をけづりすて横に切、其切たるを各うすくへぎまはして水に入、其後取出して縄にかけてほすなり。もし俄（にはか）に天氣あしくば右のごとく水に入天氣好時取出し縄にかけてほすべし。能ひたる時壺などに入おさめ置べし。右のごとくほして後、沸湯（にえゆ）をかけて又ほせば色黄白くなるといへども味あはし。

○塩干瓢の製法 瓢を大片に切塩につけておしをかけ置。いつにても日のてる時取出しほして後つばに入収置くなり。味常のかんぺうにおとらず。雨中にて製す

○乾茄子（ほしなすび）の法 わりき茄子を取皮を去り二つにわりて干置。用る時取出し水にしばらくしたして羹羹（あつもの）に加へし 物類相感志に茄子を収置に炉（いろり）の灰にまぜて置ば久しく堪ふとあり

○豇豆（ささげ）塩淹の法 米粃（こぬか）壺斗に塩四升ほど合てわかき豇豆を莢（さや）ともに漬をけば久して損せず茄子も又かくのごとくすべし。

此月醤油（しやうゆ）ひしほ納豆などを製すべし。

○醤油の製法 大麦 大豆 塩各一石 水二石二斗此内二斗は煮てへるよけいなり 先大麦を少つきて粗（ほぼ）白くし瓦器（かわらけ）にていりて石臼にて引わり大豆を味噌大豆のごとく煮て大麦の粉とかきまぜ扁器にひろげ土蔵に入麴（こうじ）となす麴塵（こうじのはな）の能付たる時右二石二斗の水に塩一石をいれ大釜にてよく煮る。其塩湯を大かたにさましはや手をひたしてもあつからざるほどなる時瓶に作り入なり。さめてもよし。作り入てよくよく拌（かきまぜ）初より家の内に置たるがよし。或十四五日外に置いて其後内に取入もあり。水へりて且出入いたつかはし作入て四十五日ほど過て粥（かゆ）を入べし。右の分量にては白米壺斗に水八斗入粥に煮て塩壺斗入よく拌ぜさまし冷たる時右の醤油瓶に入なり。さて日数三十日ほどへて酒をこすごとくふくろにもり、桶のかたはらに穴をあけ、其桶に入て穴よりもらすべし。上にはおしを追置べし。初作り入し日より凡そ七十五日ほどしてあくるつもりなり。既にしば

り取て漬、若味損じたるに昆布を切て入れば味よくなるなり。

○ひしほの製法 大豆六斗 大麦一斗 塩三升 水一斗三升
麦はなるほど白くつき水にひたし、豆は炒て引わり皮を去麦とかきまぜむしきにてむして土蔵に入、麴に成たる時水と塩と一に入て煮てさまし瓶に作り入る也。作り入て後日々能く日にほし味付たる時用べし。瓶の口を能ふさぎ気のぬきさるやうにすべし。しからざれば味はやく変ず。別（へち）に小器に入て當時食するをば分（わか）ちをくべし瓶の口をしばしば開くべからず。

○濱名納豆（はまななつたう）の製法 黒豆壺斗 小麦粉七升
先ず黒豆をみそ豆のごとく煮熟し小麦の粉を衣とし土蔵に入麴にするなり。さて水六升に塩三升入て能く煮て桶に入さまし、右の麴をくだきて塩汁の内に入又兼て生姜、山椒の皮、陳皮などをこまかに刻みてほし置、是をも麴と一時に塩汁の内に入ふたをしておもしをかけ置ば塩汁うくを其まま置取かす付のくべし又八十日ほどして味よく付なり。其時紫蘇の葉を末してきるひまぜ少日にほして壺につめ置べし。

○又納豆の法 大豆壺斗 大麦壺斗 塩六升 右豆をみそ豆のごとく煮て麦をすこしいりて粉にし大豆のあつき内に拌（かきまぜ）むしろをかけて一夜置。次の日取り出し土蔵に入かうしにねさせて後塩を入水はひたるほどに入て七日ほど置、辛皮、さんせう、しそのみ、しその葉、白胡麻、陳皮など入三日ほどおしをかけて置取り出し日にほして又おしを懸たる時出たる水をつけほすべし。

○金山寺鼓（みそ）の製法

和州與こく寺の秘方也又居家必用にもあり

大豆一升いりて引わり皮を去。麴（あらき）と細（こまかなる）とをふるひ分くべし。大麦一升能しらふよくよく洗ひ水に一宿浸し右麦と麴抹（そまつ）の大豆とを一つにして蒸し熟したる時細末の豆粉を拌ぜ土蔵に入ねせて麴となす。さて麴塵（こうじはな）の付べき一日故に茹 切て四つとし浅る茄子壺升ほど 白瓜 これも口物ほどに切壺升ほど 塩四合右茄子と瓜とを四合の塩に合せ桶に入おしをかけ一夜置明日上に出たる水を取麴をひたし瓜茄子もおおなしくかきまぜて桶に入ふたをしておもしをよくかけ置。

毎日一二度かきまぜ十日許過後後茴香、山椒の皮、山椒、穂蓼（ほたで）、紫蘇をよきほどに切て拌ぜまた前のごとくふたをして重石をかけ置。毎日かきまぜ七十日過て用べし。三四十日に及べば漸（やうや）く味つくなり。後に加る五味は分量その人の好みによるべし。

○萬年醋（まんねんす）の製法 醋と酒と等分に合せ壺に盛り堅く口をおほひ此月土用の中壺なから外に置。炎日に晒し七十日をへてこれを用ゆ。そのくみ取たるほど酒と水を等分づつ入、毎度如此すればいつまでもわく。故に万年醋といふなり。又菖蒲の葉を刻みて少ばかり入れば芳氣を發するゆへ菖蒲醋ともいふ。

日和（には）よき時梅雨に損壞したる牆壁（かきかべ）を修理すべし。又砂地の宅は旱（ひでり）する時井を浚（さら）へ黒泥（どろ）を上去て白砂を入べし。如此すれば水の氣味ともよくなる。

凡そ刀（かたな）劍（けん）鎗（やり）長刀（なぎなた）鏃（やじり）など暑月に度々ぬぐはざれば銹（さび）生ず。尤常の時もよりよりぬぐふべし。又此月鉄砲（てつぱう）馬轡（くつわ）などをみがくべし。

夏月蚊蟲（か）を去る法 蒼朮（さうじゆつ）四両 木鼈（もくべつ）仁二十ヶ 雄黄（をわう）二両半別研 以上細末して蜜にて煉丸（ねりくわん）とし急火（きゆうくわ）にこれを焚くと居家必用に見たり。又鼈（たうがめ）の骨を焼ば蚊皆死す。うなぎの骨もよし。すべて川魚の骨は焚之ば皆蚊を去。又浮萍（うきくさ）と羌活（きやうくわつ）とを焼てもよしと月令廣義に見えたり。又千金月令には五月に浮萍を取て陰干（いんかん）にし雄黄にまぜて焚之ば蚊を避くとしるせり。又五月五日田中の浮萍を取晒乾し伏翼（かはぼり）コウモリ）の血を取てこれに漬（ひた）し又晒し又漬す如此する事数度して後末して香となし焼之。大に蚊蚋（ぶんぜん）かとぶよ）を去と居家必

備い見たり。又麻の葉をけぶりにたけばよく蚊をさくる事物類相感志に見えたり。和俗には櫃（かや）の木をたく。これ又よく蚊をさくるものなり。かやと訓ずるもかやりの木といふころなるべし。古今集恋の歌に

夏なればやどにふすふるかやり火のいつまでわが身下もえにせん 詩字大集 蚊の詩に

第回揮扇摩難去纔被薰煙即使除（いくたびか、あうぎをふるって摩すれども去り難し、わずかに薰煙に即ち除かしめらる）

○又蠅（はい）多き所はわくにてなわを数条（すでう）なひてかべにかくれば蠅尽くると、是も物類相感志に見えたり。又蚤（のみ）多き所には菖蒲の末を廣（ひろ）の下にひねる又しやうぶの葉をあつめて床（とこ）にしくべしと月令廣義に見えたり。

夏月の間世人暑氣にあてられ家内或途中ににて俄（にわか）に病て死する事あり。これを中喝（ちうえつ）とも喝死（えつし）ともいふ。俗にこれを霍乱（くわくらん）といふはあやまりなり。此病人をは水にてひやすべからず。ひやせば即時に死するものなり。温湯を手ぬぐいなどにひたし心腹の間をあたたむべし。もし途中にて死し人家もなき所ならば、路上の熱土を取り臍腹（ほぞみ）の間におき人をしてその上に尿（いばり）せしめ、又薑（はじかみ）と大蒜（にんにく）をつき爛（ただら）かし熱湯（あつゆ）にて送下せば即ち活く。その後薬をあたへて保養（ほうよう）すべし。

夏の間天氣焚（やく）がごとく流汗成漿（ながらく汗みづとなし）
体力劳憊（たいりよくろうひ）するとき、生脉散を服すべし。
病とならば其症に限て清暑益氣湯、参芪益元湯等を服すべし。
又暑月此薬を服して生脉散に代ふべしと方書に見えたり。

黄芪蜜炒（みつあぶり） 人参 白朮 当归各一分五厘 陳皮 蓮肉便
をする者は山薬を以て代之 白扁豆各一分 五味子五厘 麦門冬一分 甘
草五厘 右十味或加 茯苓一分 神麴一分 煎服

凡そ暑熱の時精氣を保養して謹て発泄する事なかれ。壽世保元にはく、六月莫入房勝似灸膏盲（房に入ることなかれ膏盲に灸するより勝れり）又孫真人がいはいく夏時陰氣内に伏し暑毒外（ほか）を蒸す。心にまかせて風にあたり冷物を食ふ故に暴泄の患へを生ず。温暖なる物を食飲して大に飽くる事なかれ。

園菜（えんさい）花草などの日にいたむに水を澆（そそぐ）には炎光（えんこう）既に収まりて夕かげに澆べし。昼日氣に甚しき時水をそそげば令熱相逼（せま）りて花木共に枯ると月令廣義に見えたり又老圃（ろうほ）の云晩に地氣さめざる時水を澆ぐべからず。早朝澆てよしと。但晩にはおそく澆ぎ朝にははやく澆べし。

月令廣義にはく、六月に橙橘（橙だいたい橘みかん）に水をそそぎ土をかい茅の灰、羊の糞を壅（つちか）へば実多し。

秋の比颶風（おほかぜ）吹く所にてはあらかじめ其備へをなし板屋を固くし茅屋の棟（むね）を堅くすべし。又檣桂木（すけぎ）を備ふべし。

此月菰を食へば目を昏（くらま）す。羊肉をくらへば神氣を傷る。

野鳧（かも）鴈（がん）鶩（あひる）茱萸（ぐみ）を食事を忌む。又生葵を食へば水瘕となる。犬の為に嚙るれば終身患へをなす。冷食を節用し冷水生硬果（せいかうくわ）油膩（ゆじ）甜食（てんしよく）を過食する事なかれ。凡そ煎炒（せんしや）博炙（はくしや）博はひへんの厚味（こうみ）皆宜く少く用べし 月令廣義

凡夏の間甜瓜（あちうり）を過食する事なかれ瓜の水に入て沈むものは大に毒ありと月令廣義に見えたり。又はいく双蒂の瓜人を殺す。又油餅とおなしく食べからず。物類相感志に瓜は白梅を得て爛るとあれば、瓜を食して後白梅（むめぼし）を食べし。又麝香もよく瓜を消化す又石首魚（いしもちうを）を炙り食す

れば能く瓜を消して水となすと本草に有。

六月の六候、第一温風（おんふう）至（いたる）、第二蟋蟀（しつすつ）こおろぎ類）居壁、第三鷹乃学習（鷹すなわち学習す）、右小暑の三候なり。第四腐草為螢（ふさう螢（ほたる）たり）第五土潤溽暑（つち潤てあつくあつし）、第六大雨（たいう）時行（ときに行はる）右大暑の三候なり

小暑昼六十刻二十分夜三十九刻四十分、大暑昼五十八刻二十分夜四十一刻四十分 月令廣義

土用 もろこしにては土旺（とわう）と称す。又土王ともかけり。

春は木旺（おう）し、夏は火旺し秋は金旺し冬は水旺す。是行のうち土は四時においてあらずといふ事なし。故に定まれる位なく専なる気なくして四時のおはり辰未戌丑の月の末々とに寄旺する事各十八日、一年にすべて七十二日なり。此七十二日をのぞく時は木火金水も又各七十二日づつにして一年をなす。しかるに土は木をおそる故に春の土用は専ならず。秋の土用は土衰老して威なし。冬の土用は水と木との間にあれば専ならず。夏の土用は火と金との間にあり、夫土は火に生ぜらる故に夏の土用を以て正しく土旺の時とす。土よく金を生ず故に秋の金を土より生ずるなり。未の月は火金の間にあり又一年の中間なれば中央の土一令をすて掲げて五行の席をなすのみ。故に月令にも季夏の次に中央の土をのせたり。 我國俗土用の間日（まび）といふ事ありしかれどももろこしにはその説なければその理なき事なるにや

俗説に六月土用に入日蒜（にんにく）及赤小豆（あづき）を食へば瘟疫（くさ）を辟（さ）くとて今の人のよくする事なり。されば源氏物語の葎木（はばきぎ）の巻に、こくねちのさうやくふくするよし侍り、宗祇が説にさうやくは蒜（ひる）なりとあればいにしへより有ける事ならじ。しかれどもその本説をしらず。本草に蘘頤がいはいく昔人（せきじん）正月節食五辛以辟厲

氣謂薤葱韭蒜薑也（らつきょう、ひともじ、にら、にんにく、はしかみ）又肘後方に元日及人日麻子小豆各七枚を吞めば疾疫を消（せう）すとあり。これみな歳初めのまじなひ毎と見えたり。かかる事を彼へあやまりて六月にするにや。猶博識の人に尋ぬべし。

山桑（つばき）は六月土用の中に接ぎてよし。

六月土用の内に鼈（すはん）をとり塩を付貯置べし。泄瀉下血の久しくやまざるに用てはなはだ験（しるし）あり。また衰えたる病人に用て能く虚羸（きよるい）を臍（おぎな）を臍（おぎな）ふ用ひやうは味噌にて煮てよし。

日本歳時記卷之四畢